http://decfamily.p1.bindsite.jp/2013NEW/

We 25R

No.328　14/02/07

類語辞典

【問題】「打破する」を使った例文をつくりなさい。

【生徒の答え】「通行の邪魔になっている壁を打破する。」

さて、この生徒の答えは正解？　もちろん不正解である。前号で紹介した『辞書の仕事』（増井元、岩波新書）より引用しよう。

＊

『角川類語新辞典』(1981年刊行）の著者、浜西正人先生（中略）は、漢語に限らず、「一つの語を他の単語に言い換えただけでは意味を記述したことにならない」が持論でした。

学校で生徒に「打破」という単語を使って短い文を作りなさいという問題を出すと、何人かに一人、「通行の邪魔になっている壁を打破する」という文を答える者がいる、とおっしゃるのです。辞典の意味解説が「妨げとなるものを取り除くこと」でよしとしているのなら、この生徒の答えを咎められないでしょう。

「装飾」ということばにしても、「美しく飾ること」というだけの意味記述であれば、生徒が「結婚式に花嫁が美しく装飾して現れた」という短文を作ったとしても笑うわけにはいかない、とも言われました。「美しく飾る」という内容について、「よそおう」「きかざる」「めかす」「しゃれる」「装飾」「美装」「化粧」などの類語があり、それらの語との関連、距離や方向を見極めることで、言葉の意味は捉えられるのだ、と。

浜西先生は長年国語の教師を務められましたが、「国語科」という教科の目標は語彙を豊かにすることであり、単に辞書に書かれているそのことばの意味を教えるだけでなく、他の数々の類義語との意味の相違、すなわち体系的意味を理解させることが最も重要だとおっしゃいました。類語辞典の編纂はその先生の国語教育の実践としてあったのです。

ことばの意味は、何らかの点で似たところ（あるいは反対のところ）のある別のことばとの位置関係で決まるものだと言えます。まったく同じ意味のことばというものはなくて、あることばは必ず他のことばでは言い表せない内容をもっています。

＊

ことばは総体としての体系をもっており、個々のことばはその中に位置づけられる。そのことを学問（言語学）として明確化したのがソシュールであり、ことばは我々の認識をも規定していることを明らかにした。今その話はさておくとしても、ことばの意味を知るということが、そのことばの「体系の中での位置を知る」、つまり「類義語との使い分けを知る」ことでもあるという指摘は重要だ。（例えば、英語での「seeは自分から見なくても見えてくる感じ、lookは動かないで止まっているものをじっと見る、watchは動きのあるものを見つめているときに使う」といった使い分け学習がこのことに通じる。）

浜西先生の『角川類語新辞典』は、例えば英文和訳や古文の現代語訳をしていて、ぴったりとする訳語が英和辞典や古語辞典に見つからない時にも役に立つ。よりふさわしい訳語を考える中で、言語感覚を磨いていくことができるかも知れない。